静岡新聞　2000年1月16日

ブック・エンド

「江戸幻想批判」
小谷野敦著

江戸は明るかった、江戸の性はおおらかだったといった説は「幻想」にすぎないと断じる「論争の書」。

著者の造語だという「江戸幻想」は、バブル経済の最中である一九八七年ごろに始まったという。「イデオロギーの消えた大衆消費社会」に、江戸文化と東京を重ねる形で登場した田中優子と佐伯順子の著作が、主たる批判の対象となる。

「江戸幻想にくみしえないのは、吉原の女郎の平均寿命が二十三歳だと知ってしまったからだ」という著者の語り口は、率直でまじめだ。

（新曜社・一八〇〇円）

「トマトが野菜になった日」
橘みのり著

サラダにケチャップ、スパゲティ。トマトは、食卓に彩りを添えるとともに、調味料の材料としても大活躍だ。だが、新大陸から欧州に紹介されたトマトは、長い間「毒草」「催淫（さいいん）植物」と誤解され、せいぜいが観賞用だった。

食品メーカーの広報の仕事に携わっていた著者は、各国の歴史や古い文献をひもときながら、トマトが「毒草」から「かわいくて愛される野菜」へと姿を変えていった軌跡をたどる。古文書に見るトマトの絵や昔の料理の写真を交えながらの、見て楽しい「トマト文化史」だ。

（草思社・一五〇〇円）

「電子立国台湾」
水橋佑介著

米国や日本のパソコンメーカーなどが機器の生産委託を強め、世界のハイテク基地として注目される台湾。なぜ、台湾は電子機器の高度な製造技術を持つに至ったのか。

官民一体の半導体・パソコン技術の育成とハイテク企業への大幅な優遇税制などの政策。価格圧縮などを狙う米国メーカーとの国際連携。昨年秋の大地震にもかかわらず発展を続ける「電脳島」台湾の歩みを日本貿易振興会（ジェトロ）台北駐在員の経験を持つ筆者が、関係資料付きで解説した。

（ダブリュネット発行、星雲社発売・二〇〇〇円）